第1364回 6月1日 会員セミナー

文楽の魅力

日本を代表する伝統芸能の一つである文楽はユネスコの無形文化遺産にも登録されている。人間国宝である人形遣いの第一人者・三世桐竹勘十郎氏が、実演を交えて文楽の魅力を紹介した。

講師：三世 桐竹 勘十郎 氏

人形浄瑠璃文楽座 人形遣い
人間国宝

大阪・文楽座の人形浄瑠璃が「文楽」原型は江戸時代初期に

人形浄瑠璃は、人形を使う芸能に語り物の音楽である「浄瑠璃」を合わせたものだ。人形浄瑠璃と呼ばれる芸能は全国に存在する。文楽は明治５年、大阪にできた劇場「文楽座」で行われた人形浄瑠璃のことを指す。文楽は歌舞伎や能のように芸能のジャンルを指す言葉ではない。

文楽では義太夫節が使われるが、大阪で浄瑠璃といえば義太夫節を指す。浄瑠璃の仲間には江戸浄瑠璃の清元、常磐津などがある。長唄や小唄も浄瑠璃のように三味線を使うが、唄はメロディーを重視するのに対し、語り物は物語を語って聞かせることを重視する。浄瑠璃の前身は琵琶法師が琵琶を奏でながら平家物語（平曲）を語っていたもので、そこからいろいろな語り物が生まれたという流れがある。

語り手は太夫と呼ばれる。太夫と三味線はそれぞれ１人ずつつくのが基本だが、道行などの派手な場面では数人の太夫や三味線が並ぶこともある。これが客席から見て斜め右手の床（ゆか）という場所に並び、正面の舞台で人形がお芝居をする。人形は三人遣いの人形と一人遣いの人形の２種類がある。今から300年ほど前は一人遣いの人形が使われていた。今の人形の約半分くらいの人形を高く差し上げて遣っていた。

「足遣い」を習得するまでに最低でも10年

義太夫節を創始したのは竹本義太夫だ。農民だった義太夫が畑で作業をしながら浄瑠璃を語ると、何里も先からその声が聞こえたという逸話も残る。義太夫は1684年に大坂道頓堀に竹本座を開いた。初めは一人遣いの人形を使用していたが、1734年に上演された「芦屋道満大内鑑」が三人遣いの初演とされている。

文楽の人形遣いに入門すると、まず「足遣い」から始める。その習得に最低でも10年かかる。私は14歳で入門したが、30歳でも足遣いを続けていた。女方に立役（男の人形）と、どんな役でも人形を遣いこなし人形の首を動かす「主（おも）遣い」になるための技も、この間に学ぶことができる。

人形の動きは、主遣いが左遣いと足遣いの２人に合図を送り表現をする。主遣いの出す合図を受け止められるようになることが必要だ。また、自分が主遣いになったときには、適切に合図が出せるようにならなければいけない。「つめ人形」という端役がいろいろあるが、これを遣う訓練も大切だ。１人で遣う人形だが、必要以上に力を込めるとそれが人形にも伝わるし、楽に動くと人形も柔らかく動く。大切なのは人形中心に動くことである。つめ人形は文楽になくてはならない人形であり、しっかりと習得することが三人遣いの基本となる。

ここまで来たかという心境には何十年経っても至らない

人形の中身は、材料もサイズも昔からほとんど変わっていない。「肩板（かたいた）」という板と竹でつくった「腰輪（こしわ）」を布でつないだだけの簡素な構造だ。両肩には薄く切ったヘチマが何枚も重ねて縫い付けられている。この中に手を入れて首を扱う。これに衣裳（しょう）を着けて舞台で使用する準備を「人形拵（こしら）え」と呼ぶ。人形拵えは公演の前日までに人形遣いが行い、千秋楽が終わるとバラして部位ごとに保管し、衣裳を衣裳部に返却する。

足が十分に遣えるようになれば左遣いを勉強する。その間、子役や端役の主遣いはさせてもらえ、先輩が左遣いや足遣いになってくれる。文楽は何十年やっても、ここまで到達したかという心境にはなかなか至らない。私の師匠は今年90歳を迎えるが、惜しまれつつも２年前に「もうやり尽くした」と言い残して引退した。私も師匠のように引退したいものだが、まだまだやることがたくさんあり、つくづく奥の深い芸だと思い知らされる毎日である。

一方で、文楽の世界に入ってきてくれる若い人材が減っている。日本の伝統文化を継承していけるのか、危機を感じている。国立劇場が建て替え工事に入ってしまう前に、ぜひ多くの方に生で伝統文化（＊菅原伝授手習鑑特設サイト参照）に触れていただき、共に守っていきたい。

※写真はイメージ

＊https://www.ntj.jac.go.jp/kokuritsu/2023/sugawara-denju.html